

QR Newsletter

第四紀通信

Vol.2 No.6, 1995



巡検報告参照

Vol.2 No.6

November 20, 1995

研究委員会の公募について	2	相馬寛吉先生の思い出	10
地球惑星科学連合学会合同大会	2	国際集会のご案内	13
巡検報告	7	研連議事録	14
自然史学会連合設立について	9	学会記事	15

■ 研究委員会の公募について

庶務担当幹事 斎藤享治

第四紀学の特定の研究課題についての情報を交換し、研究を推進するために、第四紀学会では1992年に研究委員会の内規を作りました。1992年度に、INQUA/GLOCOPH対応委員会（門村浩委員長）、テフラ研究委員会（町田洋委員長）、応用第四紀研究委員会（太田陽子委員長）、海岸線研究委員会（太田陽子委員長）、上・中・下部更新統境界に関する研究委員会（熊井久雄委員長）が発足し、それぞれ活動してきました。1994年度の活動報告は、1995年のINQUA大会向けの「日本の第四紀研究ナショナル・レポート」（英文）、1993年度の報告は第四紀通信Vol.1, No.4に、それぞれ掲載されています。

このような研究委員会の内規は下記のとおりですが、研究委員会の発足を希望する会員は、12月末までに、委員会名、代表者、連絡先、目的などを記載した文書を庶務幹事（斎藤享治）まで提出して下さい。1月下旬に開催予定の評議員会に諮る予定です。

連絡先：〒338 浦和市下大久保255 埼玉大学教育学部 斎藤享治
(Tel.048-858-3195, Fax.048-858-3690)

■ 1996年地球惑星科学関連学会合同大会のご案内

行事担当幹事 山崎晴雄

日本第四紀学会では1995年9月から地球惑星科学関連学会に正式加盟しました。これにより、毎年春に行われている地球惑星科学関連学会合同大会でのシンポジウムの開催や固有セッション（第四紀学会の個人一般講演）および共通セッション（特定のテーマに対しての個人講演、所属学会を問わない）の実施が可能になりました。

1996年の合同大会は来年3月26～29日に大阪大学豊中キャンパスで行われ、第四紀学会をはじめ地震学会、火山学会、測地学会など14の学会が参加します。日本第四紀学会ではこの大会で学会固有のセッション（一般講演：半日）を開催することにしました。このセッションでは夏の大会と同様に第四紀学に関する個人一般講演を行いますので、その講演を募集します。他学会所属の人もたくさん聴講に来ることとされます。比較的地味とされている第四紀学を他の地球科学関係者にアピールする絶好の機会ですので、できる限り多くの方が合同大会に参加され、本セッションでの発表されるよう要請いたします。なお、講演は夏の大会と全く同様の形式で行います。講演時間は申し込みの数にもよりますが、夏よりは長くしたい（12～15分）と考えています。セッションの日時は予稿集原稿受け付け後でないと決まりませんのでご承知おきください。

一般講演ご希望の方は後ページの講演募集案内を参照の上、1月8日必着で合同大会共通フォーマットの講演申込用紙と予稿集原稿（いずれも写真原稿用オリジナルとコピー各1枚ずつ）を下記へお送りください。それで講演申し込みが完了します。プログラム作成の時間が短いので、締切は厳守です。FAXでは受け付けられません。講演の重複申し込み（筆頭者として複数回講演する、または講演とポスターセッションの両方を行うこと）は、第四紀学会の固有セッションについてはできません。合同大会のプログラムは2月下旬頃、皆様のお手元に直接郵送されます。送り先に変更のあった方は下記へ新送付先をお知らせください。その際、名前（ローマ字）、名前（漢字）、郵便番号と住所、電話、FAX番号を明示してください。

記

日時：1996年3月26日（火）～3月29日（金）

会場：大阪大学豊中キャンパス（〒560 豊中市待兼山町1-16）

梅田（JR大阪）より阪急宝塚線「石橋」下車徒歩10分、あるいは新大阪より地下鉄御堂筋線・北大阪急行「千里中央」経由、大阪モノレール「柴原」下車徒歩10分

第四紀学会固有セッション講演申込先（講演申込用紙および予稿集原稿送付先）：

〒192-03 八王子市南大沢1-1 東京都立大学理学部地理学教室 山崎 晴雄 宛

電話：0426-77-2592, FAX：0426-77-2589,

e-mail：yamazaki@mother.geog.metro-u.ac.jp

＜共通セッション＞

今回は以下の12の共通セッションが計画されております。[]内はコンピーナです。
 問い合わせは、それぞれのセッションの連絡先をお願いします。
 今回第四紀学会が共催する共通セッションに関してのみ、趣旨を掲載いたします。

マグマ [久城育夫・藤井敏嗣・巽好幸]

「マグマ学」の確立を目指した重点領域「マグマ」は最終年度を迎えます。マグマの物性・火山の深部構造・マントルのダイナミクス・地球史におけるマグマ、などのテーマについて、講演を募集します。「マグマ」をいろいろな角度から解析することによって、地球システムの進化史を論じようではありませんか。

連絡先：巽好幸・京大総合人間・Tel, 075-753-6867・Fax, 075-753-6872・
 e-mail tatsumi@gaia.h.kyoto-u.ac.jp

地球深部の物性と構造 [入船徹男、米田明、中西一郎]

連絡先：入船徹男 愛媛大学 理学部 地球科学教室

Tel.0899-24-7111(3591), Fax.0899-23-2545、E-mail: irifune@dpc.ehime-u.ac.jp

地球惑星物質の組織とパターン [甲斐昌一、土山 明、中嶋 悟、西山忠男、藤本光一郎]

連絡先：中嶋悟 東大 理学部 地質学教室 TEL:03-3812-2111(4515)

FAX:03-3815-9490 E-mail: satoru@geol.s.u-tokyo.ac.jp

地球磁場の起源:観測と理論の発展 [河野長、本蔵義守]

連絡先：河野長 東京大学 理学部 地球惑星物理学科 Tel: 03-3812-2111(4310)

Fax: 03-3818-3247 Email: mkono@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

全地球史解説 [瀬野徹三、川上紳一]

壮大な地球の歴史を総合的に、地球多圏相互作用の観点から解き明かそうという、世界にさきがけたプログラム「全地球史解説」が重点領域研究として進行している。この計画では、太古代まで遡った岩石試料の採集を行って、地球システム変動史の解説を目指している。この計画の特徴は、野外調査に基づいた系統的試料採集、岩石試料の効率的な一次記載、最新分析機器を用いた二次分析、新たな分析技術の開発、地球システムモデルの構築など、可能なすべての手法を結集して解説を進めることにある。本セッションでは、重点領域研究のメンバーに限らず幅広い研究分野から、関連した多様な研究テーマの講演を広く公募する。また、「地球史7大イベント」などの重要なピックスについては、招待講演を含めてプログラムを編成する。

連絡先：川上紳一 岐阜大学 教育学部 Tel;058-293-2262 Fax:058-293-2207、
 E-mail:kawa@cc.gifu-u.ac.jp

テクトニクス [山路 敦、玉木賢策、乙藤洋一郎]

このセッションの目的は、リソスフェアの変形に関連したデータやアイデアを持ちより、惑星の変形のメカニズムの理解をふかめることです。テクトニクスという学問の性格から、ここには地球物理学をはじめ地質学・鉱物学など、さまざまな背景をもった研究者があつまり、議論をつうじて思いがけない展望がしめされることを期待しています。現象を多面的にとらえるため、地域・時代・空間スケール・時間スケールをとわないことにします。

連絡先：山路 敦 京都大学 理学研究科 地球惑星科学専攻 TEL: 075-753-4166
 FAX: 075-753-4189 E-mail: yamaji@terra.kueps.kyoto-u.ac.jp

地球惑星科学における微小/微量成分分析技術の最先端 [末野重穂、村尾 智]

連絡先：村尾 智 地質調査所 鉱物資源部

TEL 0298-54-3639; FAX 0298-54-3533 E-mail: murao@gsj.go.jp

海底火山活動と熱水・鉱化作用 [丸茂克美、石橋純一郎、柴田次夫]

連絡先：丸茂克美 地質調査所 鉱物資源部

TEL: 0298-54-3634 FAX: 0298-54-3533 marumo@gsj-go.jp

地層処分に関する地球科学的課題 [渡辺邦夫、鹿園直建、武田精悦]

近年、放射性廃棄物の地層処分の安全性に対する関心が高まっている。地層処分は、考慮する時間が長く、また対象とする場が地下深部である事などから見て、地球科学が取り組まなければならない今日的な課題である。関連する地球科学の分野は、地球化学・地質学・鉱物学・鉱床学・地下水学・地震学・火山学・第四紀学など極めて広い。さらに、安全性の評

学会からのお知らせ

価のために、解析モデルや種々の予測手法を扱うため、従来の地球科学の枠を越えることが必要となる。本セッションでは、この地層処分に関する地球科学の課題について、様々な角度から発表と討論を行う。従来の枠にとらわれることなく、広い分野からの発表を歓迎する。

連絡先：渡辺邦夫 埼玉大学 工学部 Tel:048-858-3571 Fax:048-855-1378

大陸地殻の深部構造と進化, II [伊藤谷生、本吉洋一、サイモン・ウオリス、吉田武義、平島崇男]

連絡先：平島崇男 京都大学 大学院 理学研究科 TEL 075-753-4171、FAX 075-753-4189 Email hirajima@terra.kueps.kyoto-u.ac.jp

地球・惑星物性研究からダイナミクスへ [神崎正美・赤松直・河村雄行]

連絡先：神崎正美 東京工業大学 工学部 機械科学科
Tel:03-5734-2172 Fax:03-5734-2893, E-mail: mkanzaki@cc.titech.ac.jp

現在の地震学と兵庫県南部地震 [大内徹、伊藤潔、石川有三]

1995年1月17日に起きた兵庫県南部地震は戦後最大の震災をもたらしただけでなく、地震学上多くの問題を提起した。この地震に関しては震源域の淡路島や神戸を中心に、各分野で様々な観測・調査がすすめられてきた。本セッションでは、まず、こうした観測・調査の成果をもとに、この地震に関して現在の地震学で何が解明されたのかについて議論します。本地震に関する幅広い分野からの参加を期待します。内陸直下型地震に関する活断層危険度評価や強震動等地震動災害に関する一般的な議論も歓迎します。主としてポスターセッション形式で行います。

連絡先：大内 徹 神戸大学 理学部 地球惑星科学科

Tel:078-803-0580, Fax:078-803-0490 Email:toru@sc122.earth.s.kobe-u.ac.jp

<シンポジウム>

3月26日午前 「火星研究の現状と将来」 [品川裕之、向井 正、佐々木 晶]

3月26日午後 「海洋底から理解する地球のダイナミクス—ODPからOD21へ—」
[末広潔、藤岡換太郎]

3月27日午前 「陸上学術ポーリング」 [新妻信明、荒牧重雄、伊藤潔、脇田宏]

3月27日午後 「兵庫県南部地震後の地震科学：これからの震災軽減に向けて」
[石橋克彦、伊東敬祐、住友則彦、橋本 学、平田 直]

3月28日午前 「西太平洋の海洋環境」 [川幡穂高、原田晃]

3月28日午前 「遠方にある巨大彗星の活動とその起源」 [渡部潤一、佐々木晶、山本哲生]

3月29日午前 「固体地球と流体地球のカップリング・ダイナミクス (3) GPS気象学」
[田中寅夫、辻 宏道、萬納寺信崇]

3月29日午後 「干渉合成開口レーダー技術の地球科学への応用」 [藤井直之、藤縄幸雄、村上亮]

<特別講演会>

3月28日の午後、万博ホール（豊中キャンパスから大阪モノレール利用、「万博記念公園」下車、ホールまで約50分）において、2つの特別講演が企画されております。

<各学会の総会および懇親会>

3月28日の午前のセッション終了後すぐに、いくつかの学会の総会が予定されております。また、懇親会は3月28日の夕刻より、特別講演会場（万博ホール）付近のレストラン（大阪モノレール「万博記念公園」の近く）において開催される予定です。

<展示の募集>

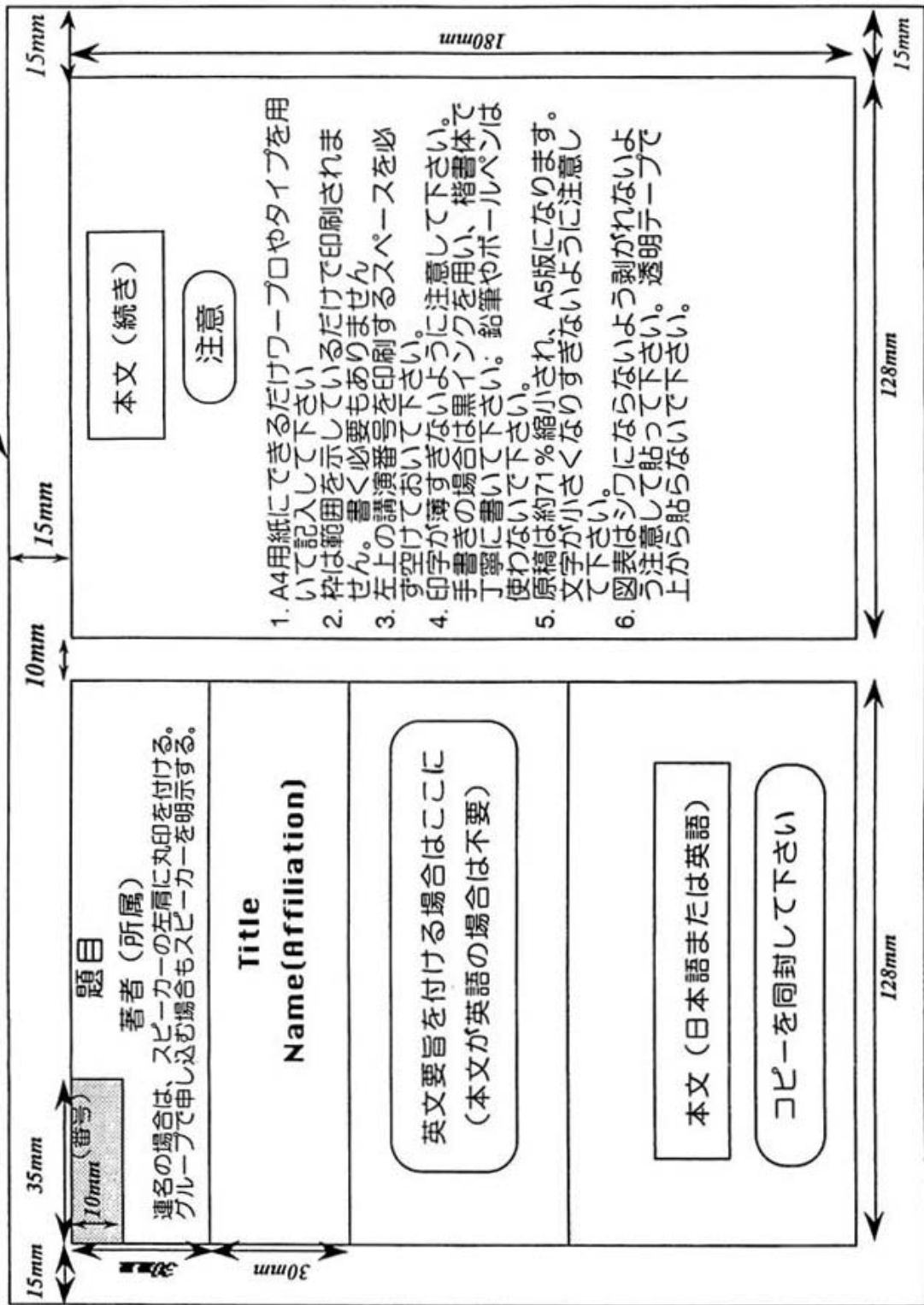
学会期間中に、個人あるいは法人による観測機器、実験機材、文献などの展示を歓迎いたします。ご希望のかたは実行委員会事務局へご連絡下さい。

<小集会・各種委員会などの開催について>

合同大会の期間中に小集会・各種委員会などを予定されている方は12月15日までに、(1)集会の名称、(2)集会の規模（参加人数）、(3)希望日時、(4)連絡責任者、(5)その他の希望事項などを文書で実行委員会事務局宛に申し込んでください。

・講演申し込み用紙は、そのまま印刷所に渡す原稿となります。記入例に従い、ワープロ、タイブなどを利用して下さい。講演題目、著者氏名が手書きの申込書は今年は受け付けません。

予稿原稿フォーマット



地球惑星科学関連学会1996年合同大会 講演申し込み用紙

講演時刻		講演番号	
講演 演 題 目	60字(英文120字)程度。ワープロかタイプで直接打つか、印字された紙を貼る。英語の場合は、文頭と固有名詞などを除き小文字で。		
著 者 氏 名 (所 属 不 要)	(漢字表記) (アルファベット表記) 必ず両方に記入して下さい ワープロかタイプで直接打つか印刷された紙を貼る。		

スピーカーの左肩に丸印を付ける。グループ発表の場合はスピーカーを明示する。

希望の□に✓してください。[]内に希望事項を記入して下さい。プログラム編成の都合によっては、必ずしもご希望に添えないことがあります。

<input type="checkbox"/> 共通セッションを希望 ⇒ セッション名 []		
<input type="checkbox"/> 固有セッションを希望 ⇒ <input type="checkbox"/> 地震 <input type="checkbox"/> SGEPS <input type="checkbox"/> 火山 <input type="checkbox"/> 測地 <input type="checkbox"/> 地球化学 <input type="checkbox"/> 惑星 <input type="checkbox"/> 三鉱合同 <input type="checkbox"/> 第四紀 固有セッション内の小区分 []		
発表方法 (希望に添えない場合もあります) <input type="checkbox"/> 口頭 <input type="checkbox"/> ポスター <input type="checkbox"/> どちらでも可		
講演希望時間 (討論を含み12分以内) [] 分		
講演順についての希望		
スライドの希望 ⇒ <input type="checkbox"/> 使用 <input type="checkbox"/> 不使用	(使用を希望しない場合、当日スライドを使えないことがあります)	
ビデオなど特殊機材の希望 (具体的に)		
申し込み責任者 (1~2月に連絡の取れる方) 氏名		
連絡先住所 〒		
E-mail	FAX	電話 (内線)

この用紙と予稿原稿、およびそれぞれのコピーを同封して下さい

■ 自然史学会連合設立と記念シンポジウムの報告

企画担当幹事 辻 誠一郎

日本第四紀学会が正式参加することになった自然史学会連合の設立総会が1995年6月3日、国立科学博物館分館研修棟で開催され、以下のような宣言が採択されました。また、連合設立を記念してシンポジウムが開催されました。シンポジウム後、第2回総会が開催され、ここで初代連合代表に速水格氏を選出、自然史学会連合運営規則を検討し、実質的に体制を整えてスタートいたしました。

自然史学会連合設立の趣旨

1. 宣言 (1995・6・3の設立総会で採択)

戦後50年、我が国ではめざましい経済発展とは裏腹に人々の自然離れが生じ、その影響は自然に関する教育・研究にも顕著に現れている。近年の入試制度に象徴される偏差値教育の世相にあつて、体験的に自然に接して正しい自然観を培う教育は著しく軽視されてきた。これは多くの優れた若者が目標や心のよりどころを見失う大きな原因になっている。一方、21世紀に向けて自然と人間の共存をはかるには、教育者・研究者だけでなく、国民の一人一人がかけがえのない自然の多様性や仕組みについて理解を深めることが不可欠である。このような社会問題に対する我が国の教育と研究の態勢は非常に立ち遅れていると言わざるを得ない。

我々27学協会はこの現状を深刻に受けとめ、自然史の教育・研究の重要性を広く訴えてその活性化をはかることが緊急に必要であるという認識で一致した。この課題を推進するためにここに自然史学会連合を設立し、共通の認識に立って活動を行うものである。

種生物学会、植物地理分類学会、植物分類地理学会、地学団体研究会、(社)東京地学協会、日本遺伝学会、日本衛生動物学会、日本貝類学会、日本花粉学会、日本魚類学会、日本古生物学会、日本昆虫学会、(社)日本植物学会、日本植物分類学会、日本人類学会、

日本生態学会、日本辞苔類学会、日本藻類学会、日本第四紀学会、日本地質学会、日本地理学会、(社)日本動物学会、日本動物分類学会、日本鳥学会、日本ベントス学会、日本哺乳類学会、日本霊長類学会 (アイウエオ順)

自然史学会連合設立記念シンポジウム (普及講演会)

「自然と人間の共生」

—21世紀の自然史科学の研究と教育の展望—

日時：10月7日(土) 午前10時～午後5時

会場：早稲田大学国際会議場

プログラム

速水格 (東大名誉教授・連合代表)

「海底洞窟動物群の意義

—生物科学と地球科学の一接点」

大場秀章 (東大)

「ヒマラヤのお花畑はつくられたものか？」

青木淳一 (横浜国大)

「動物界の知名度—ダニを例として」

斎藤常正 (東北大)

「恐竜の時代と21世紀の地球環境」

赤澤威 (東大) 「先史モンゴロイドの拡散」

日高敏隆 (京大名誉教授・滋賀県大学長)

「はくの考えている自然史」

第3回コスモス国際賞受賞記念講演 (財)

国際花と緑の博覧会記念協会後援

吉良竜夫 (大阪市大名誉教授)

「よき時代の定量生態学」

■ 「第四紀通信」編集事務局から

「第四紀通信QR Newsletter」Vol. 2, No. 6 をお届けいたします。シンポジウムなどの案内で、間に合わなかった記事もあり、深くお詫びいたします。そのような場合でも、会合報告として原稿をお送り下さいますようお願いいたします。

次号 Vol. 3, No. 1 には、1月の学会講演会の案内を載せる予定です。

次号の集会案内などの原稿締め切りは12月10日です。

編集幹事： 小池裕子

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1 九州大学大学院比較社会文化研究科

TEL & FAX 092-716-6892 e-mail: koikeygsc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

日本第四紀学会1995年大会

「新潟の古自然環境」巡検報告

細野衛（東京自然史研究機構）

巡検は、8月28日(月)・29日(火)の両日に上記のテーマで実施された。見学順に概要を報告する。

1. 長岡市立科学博物館 当館は地学、植物、動物、昆虫、考古、民族および歴史の各部門と「信濃川の自然生活展」の常設展示からなる。シンポジウムの演者小熊博史氏より考古展示について特別に説明をして頂いた。津南町の貝坂や榎ノ木平遺跡から出土した旧石器時代のナイフ形石器、下田村の御淵上遺跡から出土した尖頭器、上川村の小瀬が沢洞窟、室谷洞窟の縄文創期の遺物、関原町の馬高遺跡や三十稲場遺跡から出土した縄文中～後期の土器など日本を代表する遺物を時代順に展示してあり、信濃川中流域の当時の人々の生活を知るうえにおいて貴重なものと理解できた。特に馬高遺跡（関原面、高位段丘）の火焰式土器（縄文中期）は大型かつ複雑な飾りつけた形状のため、多くの参加者の関心をひきつけた。また、阪神播磨地震後のこともあり、出土品の展示と地震との関係について議論になった。なお、シンポジウムの報告であったような地形環境と遺跡立地の変遷を示したディスプレイがあると第四紀学サイドの理解が深まるだろうと感じた。

2. 小千谷市南部信濃川中流域河成段丘群の変形 信濃川中流域には数段の河成段丘が発達している。その概況を上位段丘面の山本山（336.1m）から遠望した。この上位段丘面や雪峠の位置する中位段丘面は現信濃川の勾配は調和せず西側へ傾斜しており、完新世と推定される段丘面も変形を示していた。古い段丘面ほどその変形が大きいという。基盤の魚沼層群はほぼ南北方向に背斜軸が発達し、見学地の段丘群はその西翼にあるため西落ちに傾斜していた。段丘の変形は基盤の褶曲構造と調和し、その運動は現在まで継続している。

3. 小千谷市北部三仏生、小栗田原の小千谷向斜小栗田原面（中位段丘）のほぼ中央の南に向斜褶曲があり、関越自動車道付近が地形的に最も凹んでいるので向斜軸があると推定された。段丘はゆるやかなカーブを描きながら見事に変化していた。完新世や更新世の段丘面とも現信濃川の勾配とは不調和で、魚沼層群の小千谷向斜軸に調和し落ちこんだ地形をし、段丘面の変形からほぼ等速で運動が継続してきたと推定される。なお、この地域は池辺（1942）「越後油田褶曲構造の現世まで行ばれていることに就いて」等で有名な場所である。

4. 越路町越路原の時水背斜 Loc. 3より西北に位置し山本山と同様最高位の河成段丘面で、段丘面

形成後変形し、北北東-南南西方向の軸をもつ魚沼層群の背斜構造（時水背斜）に支配されている。以前は、活褶曲を立証する露頭が多数存在していたが、少なくなったという。しかし、バスの中からも東西両翼方向の落ちの傾きから、段丘の褶曲変形が理解でき、背斜軸と推定されるところに抗井が散見できた。

5. 越路町不動沢の向斜構造の横断面 見学地の基盤の多くは魚沼層群であるが、その向斜構造の軸部を横断する見事な露頭が不動沢の渋海川右岸に観察ができた。シルト・砂・礫の互層からなり、軸の延長は約7kmの規模の小さい構造で、約60万年前以降の変動で形成されたという。段丘堆積物は魚沼層群を不整合に覆っているが、段丘堆積物はほぼ水平で基盤との地質構造は調和せず、段丘面形成時期がきわめて新しいことが予想される。

6. 長岡町市宮本町の小波長変形の河成段丘 初日最後の見学地。この地域の河成段丘面は小波長（500m以下）の傾きの大きく変形が顕著で、その変動速度は日本でも最大級を示すという。急勾配に変形した段丘面は、段丘崖のように見えた。ところが段丘の横断面は、背斜軸上にあたる頂部でやや丸みおびた平坦な地形をして、両翼に向かって次第に傾斜を増すようになっているという。ここでも基盤の魚沼層群の地質構造と調和している。お話によれば関原地震（1927）、長岡地（1961）のとき、背斜軸のところで隆起したことが認められ、地震時の変動が地質構造と調和しているらしい。背斜軸に相当するところに抗井が設置されていた。圧力計がついており、圧力が高まると採取する方式という。いくつかの地点で段丘の変形（いわゆる活褶曲）の見学をして、10数年前（？）に読んだ「大地の動きをさぐる」（杉村新著、岩波科学の本）を思い出した。

7. 長岡市関原の馬高遺跡 時間の都合で割愛

8. フォッサマグナパークと糸魚川-静岡構造線 二日目の最初は、フォッサマグナを地域の活性化の一環として整備された「フォッサマグナパーク」であった。今回、主に根知川沿い（右岸）の露頭を見学した。仁王堂近くではフォッサマグナの構成層である新第三系の枕状玄武岩、2000万年前頃海中（当時の日本海？）で冷却した玄武岩であったほぼ垂直の状態でも認められた。200mほど下流に行くと突然玄武岩が消失し、古生代の変はんれい岩が露出するようになった。

この途中に有名な糸魚川-静岡構造線が認めら

た。道路沿いだと崩積物ため、その確認は不可能であった。ちょうどそこに河床に下る階段があり、断層が見事に露出した。さらに親切にもプレートが随所に掲示され、構造線の重要性が指摘されていた。断層より下流側（西側）はユーラシアプレートに相当し古生代、中生代の地層から構成され、上流側（東側）は北アメリカプレートに相当しフォッサマグナ地帯で新第三紀の地層からなるという。100万年前頃よりユーラシアプレートに北アメリカプレートがめぐりこむかたちで押す運動が継続し、日本アルプスが第四紀以降隆起に転じたのはこの運動の一環のようだ。最近この種の施設(?)は日本各地にも存在すると思われるが、糸魚川-静岡構造線という日本を分断する第一級の構造線をメインテーマとしたフォッサマグナパークは、多くの人々の心をひきつけるちがいない。

9. フォッサマグナミュージアム さきのフォッサマグナパークは自然の野外展示とすれば、ここは野外で観察した結果を整理し総合化する地球博物館といえよう。すなわちフォッサマグナの生成、その命名者ナウマン博士の業績、日本海の形成などをメインテーマに展示してある。また、小滝川や青海川上流に産するヒスイの生成についてもスペースをとり、ヒスイの生成と糸魚川-静岡構造線の形成と密接な関係を示した展示であり十分見学する価値がある。以前、千葉県にある灯台で使用されていた地震計が、当館に現役の観測機器として展示してあった。最近のコンパクトな地震計と異にし、重厚で内部の構造がよく見える地震計であり、博物館には最適な生きた展示品と考えられた。試験研究機関では、まだ歴史的に価値があり十分使用可能な機器でも旧式という理由で廃棄するケースが多いと聞く。できるならば関係者の協力のもとに、実験機器の第二の人生の活躍場所を一考するのも価値ある。

10. 糸魚川市長者ケ原考古館・長者ケ原遺跡 フォッサマグナミュージアムと同じ姫川河口右岸の美山の高位段丘面にあり、縄文時代中期の集落跡である。ヒスイ、蛇紋岩製の玉類、未完成品、失敗品や原石および砥石など、硬玉生産遺跡として有名である。縄文人は、糸魚川-静岡構造線を越えて西南日本外帯の青海川や小滝川の上流まででかけヒスイ原石を採取したのであろう。ヒスイを加工する技術はすでに保有していたようだが、さぞかし大変な苦勞がともなっていると予想された。遺跡見学後、展望台から地形を遠望することになった。眼下に姫川の流れるが、その西側には飛騨山脈の白馬連峰などの日本アルプス、石灰岩からなる明星山、東側のフォッサマグナ地帯には雨飾山、焼山が見え、両者の間に糸魚川-静岡構造線が走っている。ちなみに宿泊した「ホテル糸魚川の温泉は、

古生層を掘削し1000mの深さから採取したものである。

11. 中頸城郡板倉町の地すべり地形と地すべり資料館

再度、北上し第三紀層地すべりの多い板倉町を見学した。第三紀層地すべり特有のしわのような地形と「耕して天頂にいたる」とか「田ごとの月」よふ棚田が見られた。地質は第三紀の泥岩を主体とした椎谷層や寺泊層などの直上にのる指標テフラの存在から13万年前頃から始まっているらしい。大規模地すべりの場合、その末端部分は再び地すべりが活発化するらしい。このような地すべりの場合、小出博氏の「災害の免疫性」は例外となろうか。地すべりというと災害の面が強調されやすいが、地すべり現象を通じて稲作の培地すなわち水田を造成しやすい条件がえられる。また泥岩質のため水持ちがよく養分も豊富で、昔から地すべり地帯は有数の水田地帯でもあったという。それゆえ山間部としては村落が発達し人口密度が高い。人々は地すべりの危険が少ないところ（不動点）に家をつくり、地すべりのところに水田を耕し生活が続いてきた。地すべり資料館は雪国の生活、地すべりメカニズムや防止工法など映像や模型を通じて体験するコーナーなどあり、地すべり現象を学ぶ契機になりえるかもしれない。

12. 大湯町古砂丘は時間の都合で割愛

以上で「新潟の古自然環境」の巡検は終わった。2日間の日程であったが、多岐にわたる見学をし、大いに勉強になった。初日のお昼に、小千谷の須坂屋で当地名物「へぎそば」の味わいを堪能した。大きく浅い長方形した木製のお盆のような器に、お蕎麦を一口ぐらいにまとめ整然と盛り付けしてあった。その数は50ぐらいか。暑いさなかということもあり、冷たい「へぎそば」は食欲をそそった。参加者の中で「へぎそば」の「へぎ」とはどんな意味があるのだろうかという話題になった。小生の解釈によれば、器に桧や杉を薄くはいた板つまり折板（へぎいた）を利用しているのので「へぎそば」とよぶのだと思う。また、つなぎとして海藻を用いている。「へぎそば」は海の幸、山の幸をたくみにハイブリットした自然豊かな食事といえよう。夏の巡検に最適なお昼を手配していただいた担当者の配慮に頭がさがるばかりである。

最後になりますが、今回の巡検のガイドをしていただいた鈴木郁夫氏（新潟大学）、長谷川美行氏（新潟大学）、高野武男氏（新潟大学・非）さらに第四紀学会巡検担当者皆様のご苦勞に感謝を申しあげる。

表紙写真説明

Loc. 5 魚沼層群の向斜構造の横断面
越路町不動沢、手前は渋海川

転換期を支えた故相馬寛吉会長

前幹事長 上杉 陽

“あともう少しだね”、“はい、もう少しです。”それが、先生との最後のやりとりになりました。副会長時代から、ほぼ4年間、体調が悪いまま、なんとか乗り切り、会長役をおりたら嫌いな手術も受けるし、そのかわり酒もたっぷり飲むぞという覚悟だったように思います。とても酒好きの先生でしたが、幹事一同、とうとう一度も飲みに行きませんでした。こんなことになるのなら、一度飲んでおけば良かった……。先生は、今頃あの世で大好きな「浦霞」をたんと飲んでおられることでしょう。

相馬先生が会長をされた1993年から1995年は、色々な意味で、大きな時代の曲がり角にありました。新しい関連学会、連合体が次々と誕生し、古くからの連合学会である本会は、どのような質を持ち味とする連合体なのか、旗幟を鮮明にする必要に迫られていました。激しい国際化に対応しつつ、一方で郷土の科学としての第四紀学の全国的普及策を考えねばなりません。学会機能の首都圏1極集中を排し、地方での第四紀学の普及をかねて、地方分権を進めることが急がれていた。

この時期に、第四紀学会は、新しい連合体である自然史科学連合、そして地球惑星科学関連学会に参加することを決断しました。「第四紀研究」編集委員会を関西に移行し、そこからnews letterを「第四紀通信」として切り離しました。いまでは、これは北九州で編集され発行されています。また、企画担当幹事が置かれ、若手会員獲得と第四紀学の普及をめざして「講習会」が恒常的に開催されるようになり、本会論文賞も創設されました。消滅の激しい第四紀層の記載保存を全国的に進めるために、このため専門の編集委員会が新たに設けられました。先生の任期の終わりに近い1995年1月17日には、兵庫県南部地震は発生し、本会は他学会に先んじて速報会を開催した。

忙しく、気のくたびれる2年間でした。先生からは、驚くほど細かい字でびっしりと書かれた手紙を何回か頂戴しました。先生は11分野に細かく気を配りつつ、大きく決断されました。前期幹事会を代表して、先生に心からの感謝と哀悼の意を表明します。

最後に先生のお手紙の一文を「遺言」と感じますので、書かせていただきます。

「学会としては学会誌がprimarilyに原点で、他はaccessoryだと思っておりますので、その原点に思いを入れていれば、たとえ一時的に会員数減があっても、supportする人は続くと思っております

(1995年1月13日 相馬寛吉)」

相馬先生と花粉分析学の系譜

三浦 修 (東北大学大学院理学系研究科)

本学会会長(当時)相馬寛吉先生の訃報は身近にいた私にとっても突然であった。葬儀後にもたれた「偲ぶ会」での思い出話には、先生とのお酒にまつわることが多かった。中でも印象深かったのは、歴史民俗博の辻誠一郎さんが話された墓碑銘のことである。春3月お二人で酒を酌み交わしながらの一時、先生はご自分墓所と墓碑銘をすでに準備なさったことをしきりに話題にされたという。

私が先生と酒宴をご一緒したのも春3月の漁村の宿であった。先生は何時になく僅かの酒量でご酩酊の様子、「相馬先生もお年のせい酒に弱くなったな」との思いであった。そんな場面で「先生!お酒はほどほどに!」など、たしなめようと思う方はおられまい。

ところで、日本における花粉分析学の歴史には生物学と地質学の流れがあり、前者は東北大学理学部生物学教室を中心に編まれるに違いない。

萌芽期は1930年代半ばからで、神保忠夫先生が欧米の成果を紹介し、ご自身も八甲田山を対象に研究を開始された。発展期は、神保先生の下に誕生したお二人の碩学、高知大学の中村純先生と東北大学の相馬先生の時代である。先輩の中村先生は1940年代後半から、主として湿原の泥炭層を分析された。相馬先生は1950年代後半から、各地の湿原泥炭層、第四系、第三系をそれぞれ精力的に数多く分析された。分類学講座に長らく在籍された先生の研究には、化石花粉の分類レベルについても「種」の意識が常にあったように思う。その同定に納得のいかない花粉種を載せた研究者や論文に対する皮肉たっぷりの批判を、先生はしばしば口にされた。

現在に続く充実期は、中村、相馬両先生の弟子達の次代である。本学会員に限ってその系譜をたどろう。中村先生の下からは、高知大学の山中三男さん、岡山理科大学の三好教夫さん、宮城農業短大の目比の絃一郎さん、東北生活文化大学の守田益宗さんなどが輩出した。

一方、相馬先生の下で育った東北大学関係者には、斎藤報恩会自然史博物館の竹内貞子さん、国際日本文化研究センターの安田喜憲さん、千葉県立中央博物館の米林仲さんなどがおられる。日比野さんと守田さんも東北大学時代には先生とともに研究に励まれた。また、歴史民俗博物館の辻誠一郎産、明治大学の叶内敦子さんなどは、先生の業績や人柄を慕って仙台に通われた。

先生の育んだ研究者は、いずれも各方面で活躍中であり、花粉分析を指導する立場におられる。現在は、先生のいわば孫弟子の勢力が拡大しつつある時代である。

私は、分析のノウハウを直接教わったことはなかったが、論文校閲やゼミでの議論を通じて、先生の花粉分析学を學んだ。私は、花粉分析の主題である植生史の研究を放棄して、土壌の花粉分析から現生群落の動態を解明しようという問題に入れ込んでしまった。しかし先生には、土壌花粉分析の研究を批判されたが、決して否定された記憶が私にはない。

先生は退職後、東北大学植物園の一角に研究室をもたれたので、より身近になった私は、コーヒータイムと雑談のお相手を度々させていただいた。楽しい、時として苦いご自身の研究の裏話が多かった。前掛け姿で終始穏やかに紫煙を吹いておられた。

相馬先生の思い出

竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）

私と相馬先生との出会いは、今から35年程前になります。私はわけあって花粉分析をすることになり、先ず地質調査所の徳永先生に弟子入りし、新宿区河田町の先生の研究室に通いました。その後仙台で相馬先生の指導をうけたわけですが徳永先生には花粉学の理論的な面での教えをうけ、相馬先生には実際面で指導していただきました。当時、東北大学の理学部はまだ市の中心部にあり、生物教室と地質教室の建物はテニスコートをはさんで隣り合っていました。はじめて相馬先生の研究室を訪ねたのは、たしか2月頃の寒い時だったように記憶しています。石造りの生物教室の最上階だったと思いますが、先生は研究室券実験室のようなところで、ストーブを囲んで学生たちと何やら議論をしておられました。私が入っていくと、先生はそこにいた学生たちに私を紹介して下さいました。私は地質教室の研究生でしたので、地質教室の先生から前もって連絡をしておいていたのですが、それにしても、はじめて会う私をまるで旧知の仲のように扱って下さった先生の態度にびっくりしてしまいました。その後で何をしたかの記憶は定かでないのですが、先生が入れて下さったお茶を飲みながら、楽しくおしゃべりをしたことだけは忘れられません。

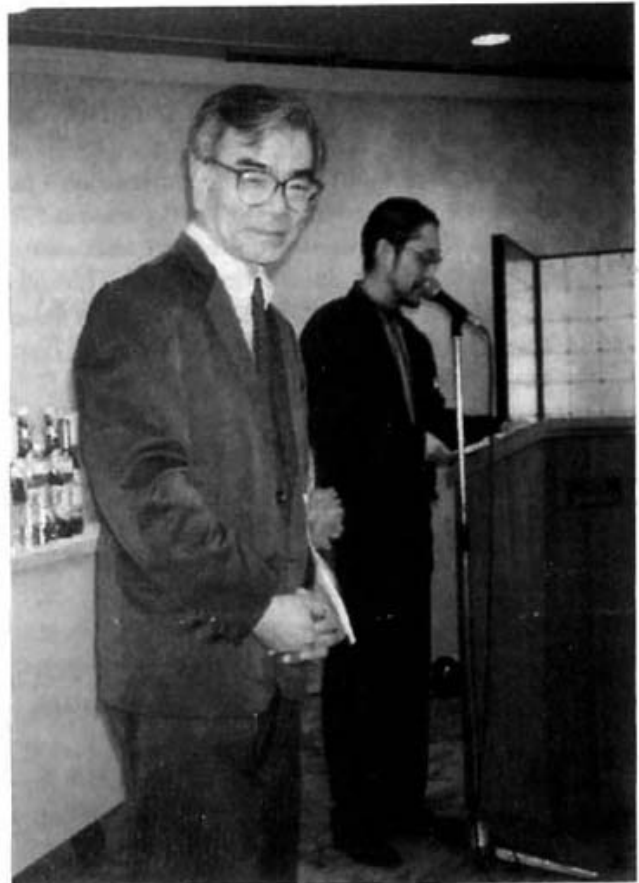
あれから30数年間、先生とのお付き合いは、師弟として研究仲間としてまたある時は友達として、淡々と続いてまいりました。そして、先生に最後にお会いしたのは、奇しくも今年の2月、寒い時でした。前にいただいた先生の論文別刷が見当たらなくなってしまい、もう一度いただくために先生がお仕事しておられた研究室を訪ねたのです。鈴木敬治先生亡きあと会津盆地の古植物の研究をどうまとめるかなど話し合ったりしたのですが、後から考えると、その時すでに先生も病魔に

とりつかれていたのです。それを表に出さなかった先生。先生が亡くなられたこと、いまでも信じられない気持です。

「相馬さん」を偲んで

辻誠一郎（国立歴史民俗博物館）

おれには師もなく弟子もない、とよくおっしゃった。自分の考えを押しつけようとはされなかった。人を指揮しようともされなかった。分野にこだわりも持たれなかった。大勢というものを良くいわれなかった。飾らなく、肩肘はらず、どうしてこんなふうに孤高に生きつづけられるのかと、いっしょに歩いてよく思った。門分の生きようとするところを、すなおに、静かに、生きようとしておられた、と思う。どこにでも居るような人ではないのに、いつもそばに居る人であった。そう



退官記念パーティで司会者に紹介され
恥ずかしそうな相馬さん
(1990年3月18日)

相馬先生の思い出

いう人だから、亡くなくてもまだまだ実感がない。

第四紀研究の編集に長く関わっておられた。原稿のすみずみまで読み通され、徹底して赤を入れられた。赤が込み入ってくると、緑や青も入れられた。匙を投げず、このように書けばずっとよくなる、分かりやすくなるのではないかと、問い掛けるように原稿をご覧になった。それで、没にならずに掲載された論文がたくさんあるように思う。投稿する前に私もたくさんの原稿を見てもらった。虹色に染まる原稿の束を大切に保存してある。

20数年前、最初にお会いしたとき、先生と呼ぶなどおっしゃった。それ以来、面と向かって先生とは呼ばせてもらえなかった。さんであった。化石標本の保存方法の手ほどきを最初に受けた。それ以来、標本を持たずに会話ができなかつた。おれのやり方は一例だから、自分で工夫してみろとおっしゃった。一生でできることは限られているのだということ、じっと耐えて眩いてこられたのかも知れない。はるかに年齢の違うわれわれ、同じ高さの目線で見守っていただいたのは、その証である。研究をすることの楽しさ、厳しさ、そして生きつづけるためのもろもろを、日常生活から身をもって教えていただいた。

相馬さん、ご冥福を祈ります。

懐かし相馬先生

劉平妹（台湾大学地質学系）

1984年の7月から10月まで早坂祥三教授の紹介で、台湾から東北大学へ相馬寛吉教授を訪問いたしました。その時私は34才、教師としても研究者としても経験が少ない。その3か月の滞在、相馬先生の親切な指導のお陰で、以後研究と教師の使命に大きな力量を与えて下さいました。

相馬先生に接した人は、先生の研究精神と学生の教え方にみんな感心します。先生の言行は、私にとって大きな啓示を与えて下さいました。私は指導者と研究者として、如何にすればもっと学生の為になるかと考えていました所、相馬先生の熱心な指導のお陰で私は大きな収穫です。

1992年FranceのAixで第8回花粉大会に先生もいた。本当に喜びました。私は瞭解できない問題を先生に教えて頂きました。先生は学術界に関する感想を発表いたしました時、懐かし其の声までもはっきり覚えています。この7月に黄増泉教授に会いました時、相馬先生の亡くなった消息をききました。感慨無量です。機会がありましたら、また先生を訪問する積もりでした。Franceの会見が最後の会見になろうとは夢にも思いませんでした。先生のご恩をいつまでも忘れません。ここから先生のご冥福を祈ります。

相馬寛吉先生の思い出

米林伸（千葉県立中央博物館）

相馬先生と初めてお会いしたのは、教養部2年生に対する学部紹介的な講義を除けば、東北大学生物学科3年の時（1977年）で、先生は「植物形態学I」という講義を担当されていた。当時の私のメモのようなノートを見返してみると先生が終始一貫して扱ってこられた花粉の話がほとんど出てこないのに驚く。わずかに植物形態学と関連する学問分野の中にpalynologyという語が見られるだけである。先生はtraining, learningとstudyを明確に区別され、学部は、trainingの時代だと言っておられたが、教える側も安易に自分の得意分野に引き込まず、基礎をしっかりと教えるという真摯な態度には頭が下がる。

植物生態学講座の卒論で空中花粉を始めた私は植物分類学講座におられた相馬先生の所にも相談に行った。その際アセトリシス処理をしないで同定・計数している私の方法に対して「そんな方法では花粉くの種類が判るはずないよな」と当を得ているが厳しい指摘を受けて返答につまってしまった。現在でも同じような方法で仕事をするところがあるが、いまだにこの指摘は課題として残ったままである。そんなことや、先生が教養部に移られたこともあって、その後しばらくは修士論文や博士論文をまとめるときに何度か相談に行くくらいで、やや疎遠になってしまった。

私が大学院研究生をしているときに英文のやや長い原稿を見てもらったことがある。あらかじめ生態講座の先生には見てもらっていたし、英語の論文が初めてというわけではなかったの、正直なところコメントをもらい、打ち直せばよいという軽い気持ちであった。そして、その後何カ月も教養部に通うことになろうとは、その時は夢にも思っていなかった。はじめのうちは話し合いながら論文に手を入れていったが、そのうちに図を全面的に差し替えることになり、さらには構成も、というように話が広がっていき、最後は先生が原案を少しづつタイプされて「これでいいか」というやり方になってきた。この論文は幸い日の目を見たが、このことがあってからは、あまりに申し訳ないので、先生には完成後の論文をお贈りしてコメントをもらうようにしていた。今でも私の手元にはルーズリーフのノートにタイプしたものを少しづつ張り合わせた草稿が残っており、先生がこの論文のためにいかに時間と労力を使ってくださったかを語り続けている。私が隣の研究室に所属していたこともあって、先生にとってはやりづらい点多かったと思うが、最後まで「手のかかる学生」として親身に扱ってくださったことに感謝します。

■これから開催される第四紀研究関係の国際集会のご案内

大阪市立大学 熊井 久雄

- Quaternary Deserts and Climatic Change (IGCP 349 Meeting)** ;December 9~11,1995, Al Ain, United Arab Emirates ;A S Alsharhan, Desert and Marine Resource Center,UAE University,PO Box 17777, Al Ain, United Arab Emirates;Tel:971-3-638-150,Fax:971-3-620486
- Natural Hazards, Land-Use Planning and the Environment (6th Spanish Congress and International Conference)**;April 24~27,1996, Granada, Spain ;Clemente Iligaray FernJndez, Departamento de IngenierKa Civil, Facultad de Ciencias,Universidad de Granada, Campus Fuentenueva,18071 Granada,Spain; Tel,Fax:34-58-243-367,e-mail:jchacon@ugres
- International Symposium on Archaeometry**; May 20-24, 1996, Urbana-Champaign Illinois; Sarah Wisseman, ATAM Program, University of Illinois, 116 Observatory, 901 S. Mathews, Urbana, Il 61801, USA; Tel 217-333-6629, Fax 217-244-0466, e-mail wisarc@uxl.cso.unic.edu
- Landslides (7th International Symposium)**;June 17~21,1996, Trondheim, Norway ; Norwegian Geotechnical Society, PO Box 40, Taasen N-0801, Oslo, Norway
- International Palynological Congress (9th)** ;June 22~29,1996, Houston, Texas ;Dr Vaughn M Bryant, Department of Anthropology, Texas A & M University, College Station, TX 77843, USA; Tel:409-845-5242, Fax:409-845-4070, e-mail:glwrenn@lsuvm.sncc.lsu.edu
- Erosion and Sediment Yield: Global and Regional Perspectives**; July 15~19,1996, Exeter, UK; Professor D Walling,Department of Geography,University of Exeter Rennes Drive, Exeter EX4 4RJ, UK.; Tel:44-392-263345, Fax:44-392-263342
- International Geological Congress (30th)**; August 4~14,1996, Beijing, China; 30th IGC, PO Box 823, Beijing 100037, China; Tel:86-1-8327772, Fax:86-1-8328928
- Congress of the International Union of Prehistoric and Protohistoric Sciences**; Sept. 8-14,1966; Forli. Alla Segretaria del XII Congresso U.Z.S.P.P., Casa Saffi, Via S. Marchesa 12, I-47100 Forli, Italy; Fax 390-543-35805
- Drought, Groundwater Pollution and Managemant (Intenatinal Workshop)**; January 1997, Dindigul, India; Managing Director,Tamilnabu Water Supply and Drainage Board,TWAD House, Chepauk, Madras 600 005, India
- Geology and Environmant (50th Geological Congress of Turkey)**; September 2~6,1997, Istanbul, Turkey; Secretary GEOENV '97, PK 464, Kizilay, 06424 Ankara, Turkey,; Tel:90-312-4343601, Fax:90-312-4342388, e-mail:jdogan@et.cc.hun.edu.tr
- Groundwater in the Urban Environmant (27th IAH Congress)**; September 21~27,1997; Professor JD Mather, Geology Dept., Royal Holloway and Bedford New College, Egham, Surrey TW20 0EX, UK; Fax:784-471780
- Physical, Chemical and Biological Aspects of Aquifer - Stream Sediment Interrelations (28th IAH Congress)**; October / November, 1998; Dr J Rosenschein, USGS MS 414, National Center, Reston Va 22092, USA; Fax:703-648-5722

■ “東海地震” 防災セミナー1995 (第12回) のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、下記のとおり本年も開催致します。

テキストを印刷します。御希望の方は会場入口でおわけします。(1部 ¥1,000)

日時：平成7年11月10日(金) 13:30-16:00

会場：静岡商工会議所会館(JR静岡駅北口西側)

主催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 (土 隆 一)

Tel 054-238-3240 Fax 054-238-3241

テーマ：阪神大震災の教訓を東海地震にどのように生かすべきか

座長：名古屋大学名誉教授 飯田 汲事

1. 最近の大地震からの教訓 東京大学地震研究所 阿部 勝征
2. 土木構造物の今後の課題 東京大学生産技術研究所 片山 恒雄
3. 建築物の今後の課題 清水建設(株) 渡部 丹

■第16期第4回第四紀研究連絡

委員会議事録

日時：平成7年6月16日(金) 13時30分～16時20分
場所：日本学術会議第7部会議室(6階)
出席者：池田安隆、上杉陽、太田陽子、大場忠道、小池裕子、酒井潤一、新藤静夫、立石雅昭、松島義章、米倉伸之(10名)
欠席者：熊井久雄、相馬寛吉、野上道男(3名)

1. 前国(3月10日)の議事録案を承認した。
2. 報告

(1)日本学術会議地質学総合研連報告(新藤会員)

- 1)「阪神・淡路大震災調査」特別委員会の設置が連合部会(平成7年4月18日)で承認された。
- 2)121回総会が平成7年4月19日～20日に開催され、会長により基調報告「日本学術会議の課題—高度研究対性を目指して—」があり、会員推薦手続きの改正などについて議論がなされた。
- 3)第4部会ではICDP(国際陸上科学掘削計画)小委員会の提案が報告された。
- 4)「社会が期待する地球科学教育」についてワークショップを企画することが提案された。
- 5)「地球科学関係学協会連絡協議会」構想が提案され、関連諸研連で検討してもらうことにした。

(2)平成8年度概算要求(委員長)

平成7年3月20日に平成8年度概算要求資料(国際第四紀連合活動要覧の改訂版印刷費30万円、平成8年国際会議代表派遣、平成8年度国際学術団体分担金要求調書)が提出されたことが報告された。

(3)16期研連活動方針および国際対応アンケート(委員長)
平成7年3月20日および5月4日にそれぞれ上記アンケートが日本学術会議に提出されたことが報告された(資料配付)。

(4)日本第四紀学会への要望書(委員長)

平成7年3月31日附けで、日本第四紀学会会長宛てに、INQUAベルリン大会への活動報告の印刷費、輸送費を学会で負担してもらえよう依頼したこと、INQUA副会長候補者および名誉会員候補者を推薦したこと、今期の活動方針について説明した文書を送付したこと、それに対して、今期の予算ではINQUA対策費が10万円であるとの連絡があったことが報告された。

3. 審議

(1)INQUAベルリン大会への対応

1)日本第四紀学会研究委員会委員長宛てに活動報告の原稿(英文)依頼を3月31日附けで送付したこと、原稿のあつまり状況が報告され、6月末に原稿をまとめ、40～50頁の小冊子として印刷し、ベルリン大会に間に合うように発送する予定であることが委員長から報告された。また展示につい

ては、準備が遅れているが、兵庫県南部地震の活断層と地盤災害関係の展示の作成を関係委員に協力をお願いすることにした。

2)INQUA執行部から送付されてきたベルリン大会の総会、国際評議会の議題案、役員候補者リストなどが配付され、副会長候補者の推薦について運動することとした。

3)参加予定者のリストの作成、シンポジウムや巡検への参加予定についてのアンケートおよび大会報告の原稿依頼について検討した。参加予定人数は確認されたもので23名となり、30名前後の参加が見込まれる。

(2)今期の活動計画

1)年代測定小委員会(仮称)に関する活動について地質学研究連絡委員会の地質年代小委員会兼岡一郎委員長から第四紀関係者の参加が要請され、米倉委員長が小委員会委員となったことが報告された。上杉委員から、放射生炭素年代測定に関する現状調査の結果について報告があった。海外における測定機関と比較して、国内の商業的測定機関を育成するのはかなり困難であると予想されること、タンデムの設備が全国的に充実される方向にあること、年代測定に関する研究教育施設を充実し、第四紀関係年代測定施設のネットワークを整備することが必要なことなどが述べられた。加速器による年代測定を早くするためには、測定依頼者側で前処理をしておくことが望ましく、そのために講習会などを企画することや前処理のための実験施設を作ることを奨励することなどが話し合われた。今後、放射性炭素年代測定を中心として、主として年代測定の利用者の立場から、年代測定に関する研究教育体制の充実のために、研連内のワーキンググループ(当面、上杉陽、中村俊夫、米倉伸之の3委員)とともに、学会側には研究委員会を作ってもらって、対応することにした。

2)大学における第四紀研究の教育研究の現状について

立石委員から、アンケート作成の上での留意点などが述べられ、また各委員から、国立、公立、私立大学における改革に伴う第四紀や環境地質に関する整備の状況や国立19大学では地質系教室主任連絡会議があって情報交換が行われていることなどが紹介された。

アンケートを実施するほかに、各大学における自己点検や白書などの資料を収集すること、日本第四紀学会会員が複数在籍している大学や博物館など、日本における第四紀研究の拠点ともいべき研究教育施設の活動について「第四紀通信」に紹介することなどの提案があった。博物館について、文部省側は研究博物館と教育博物館の区別を明確にしようとする動きもあり、大学だけでなく博物館なども調査対象とすることにして、ワーキング

グループの名前も「大学等における第四紀研究の教育研究の現状」とすべきとの意見が述べられた。

3) シンポジウムの開催について

阪神・淡路震災関連のシンポジウムとして、6月20～21日に目黒文化会館にて、日本地質学会（環境地質研究委員会）主催のシンポジウム、6月26～28日に日本学術会議にて、第25回安全工学シンポジウムが開催される予定であると報告された。

日本第四紀学会創立40周年記念大会は、1996年に東京大学を会場として開催される予定で、シンポジウムのタイトルとして「縄文時代の環境と文化」という案が、委員長から示されたが、今後学会側とも協議することとした。

4) 国際的活動について

IGBP関連のシンポジウムについて、IGBP-LOICZの第2回国際シンポジウムが4月24日～27日にフィリピン大学海洋研究所で開催され、42か国、204人の参加者があったこと、6月10日に北京で18回太平洋学術会議に際して、LOICZワークショップが開催されたこと、IGBP-PAGESの国際シンポジウムが1995年11月28日～12月1日に名古屋大学で開催される予定であることが、委員長から報告された。第5回国際古海洋学会議がハリファックスで1995年10月に開催され、日本から30名くらい参加する見込みであること、そのためにその2週間後に済州島で開催される予定の第3回東アジア海洋地質シンポジウムには参加者が少ない見込みであることが、大場委員から報告された。

4、その他

上杉委員から日本第四紀学会の最近の動向について、野島地震断層の保存については、北淡町は博物館を建設して保存する方向で動いていること、中田委員から提案のあった天然記念物指定については町は否定的であること、第四紀学会は地球惑星科学関連学会の合同大会に正式に参加することを決めたこと（ただし夏の大会は従来通り開催する）、それに対応するにはかなりの仕事が増えるので幹事会の体制を充実する必要があること、今年度の大会・総会の日程などが報告された。

今回は1995年9月29日（金）13時30分から16時30分まで日本学術会議にて開催する予定。

■ 第2回幹事会議事録

日時：1995年10月7日（土） 14:00～17:00

場所：東京大学理学部地理学教室会議室

出席者：鎮西清高（会長）、米倉伸之（副会長）、坂上寛一、小池裕子、山崎晴雄、吉川周作、斉藤享治（以上幹事）、村上 聡（学会センター）

1. 庶務

(1) 「海洋調査技術学会第7回研究成果発表会」（1995年11月9～10日、海上保安庁水路部大会議室）の協賛学会となることを承諾した。

(2) 「日本第四紀地図」増刷分の印税について、1990年4月16日幹事会決定と同様、編集委員に1冊ずつ配り、残りを学会会計に入れることにした。

(3) 研究委員会について、第2回評議員会で承認できるように、第四紀通信を通じて公募する。

(4) 内規集作成のための準備を行うこととした。

(5) 秩父宮記念学術賞受賞候補者の推薦については、依頼文が来てから公募しても提出期限に間に合わないので、次回以降、第四紀通信に適当な時期に前年度の推薦要項を掲載することとした。

(6) 新潟大会のシンポジウム非会員発表者5名に見本用として特集号を各1冊献本することとした。

2. 会計

(1) 10月5日現在の会計状況が報告された。

(2) 会員名簿と第四紀通信Vol. 2, No. 5は、当初、郵送料軽減のため同封する予定であったが、名簿重量が予定より軽くなり、郵送料に差がほとんどなくなったので、急いでいる第四紀通信を先に郵送した。

(3) 会員名簿の広告の収入が77万円あった。

3. 編集

(1) 編集状況が報告された。受理論文が確保されているのはVol. 34, No. 5までである。

(2) 第四紀研究の投稿原稿が少ないので、大会発表者に投稿呼びかけの文書を送付する。

(3) 1995年地球惑星科学関連学会合同大会の第四紀学期提案シンポジウム関連の論文の取り扱いについて、コンピナーと幹事会が相談することとした。

4. 会報

(1) 第四紀通信Vol. 2, No. 5を9月に発行した。

(2) 第四紀通信の巻末に広告を掲載するかどうかについて、どのくらいの広告料か調査する。

5. 行事

(1) 地球惑星科学関連学会の正式加盟が、9月12日に決定した。1996年合同大会の第四紀関連の共通セッションには、「マグマ」、「全地球史解説」、「テクトニクス」、「放射性廃棄物の地層処分に対する地球科学の貢献」、「兵庫県南部地震後の地震科学」がある。

(2) 神奈川県立「生命の星・地球博物館」の見学会（10月22日）の参加申込を受け付けている。

(3) 第2回評議員会（1月下旬）時の特別講演会の講演者の候補を検討した。

6. その他

- (1) 会則改正に伴う会長推薦幹事1名の増員について、役割、候補者などを検討した。
- (2) 論文賞選考委員の候補者の検討を始めた。
- (3) 第1回評議員会で検討課題となった、30周年記念事業の未完了企画に対する方針をだすために、これまでの経緯を調査した。未完了で方針が決まっていない「第四紀年代アータブック」と「第四紀学用語集」について今後検討することとした。
- (4) 科研費（刊行助成金）のゼロ査定については、提出文書の検討など、庶務幹事が中心となって取り組むこととした。
- (5) 40周年記念企画の一つとして、名誉会員の推薦を検討することとした。
- (6) 第四紀研究連絡委員会の相馬寛吉委員の逝去に伴う補充候補者について、委員候補者の決定に用いた評議員の投票において、次点者であった坂上寛一会員を候補者として推薦することとした。